

# 「介護教育における死」の授業方法に関する一考察

福原信子

## はじめに

- ① この小論は、介護の専門職として避けることのできない人間の死について、どのような死生観をもって臨むべきかを学生たちに身につけさせるために、授業のカリキュラムのみならず様々な死に向き合うよう働きかけ、工夫した経緯からそのプロセスにおける学生の心のありようを観察し、考察したものである。

一般的に人間の死に対しては厳粛さを伴いながらも、こわい、悲しいといった負のイメージがつきまとう。現在では人の死はおおむね8割が病院で、あと2割は在宅または施設で亡くなる状況である。死と向き合う人、時間も限られてくる。しかし施設等ではもちろんその他の場合でも介護福祉士は死を前にした人間への慈しみや看とりの実際など終末期の介護で適切な役割をはたすことが求められる。

- ② 終末期の介護のカリキュラムは、当福祉学科では平成14年度までは介護技術Ⅱの中の1章として2回生の卒業に近い後期に行われてきた。それは第3段階実習の後となっていた。その施設実習においてある学生は利用者の死に直面したのである。学生にとっては終末期介護の授業は受けておらず困惑し対応もできずおろおろするばかりで、負のイメージがつのり精神的に落ち込み、介護福祉士となる自信をすっかりなくすことが起き、ついには卒業しても「介護福祉士になりたくない」という発言もみられた。

そこで授業を担当する私として「終末期の介護」について2回生の学生にどのようにして理解させるかを検討した。主な内容は次のとおりである。まず第1に、終末期の介護は人間の尊厳をまっとうする場面として、専門職として介護のあり方を問われるものであり、ひいては死を考えることはいかに生きるかを考えることであるという死生観を学ぶ必要があること。第2に、授業のカリキュラムのみでなくレポート、アンケートなどの手法をもって自らの死の連想、親しい間柄の人、さらに死一般など様々な死を考えさせるようとりくむこと。第3に、15年度は第3段階実習の後に授業と初めての試みとしてレポート、アンケートなどを設定して認識を深め、さらに16年度には授業、アンケートなどを第2、第3段階実習の前に繰り上げ行うこととした。(対象学生は15年度36名、16年度59名)。

なお、テキスト授業とアンケート、レポート実施(集約枚数)の時期をまとめれば次の通りとなる。

年度	前 期		後 期
15		実習	アンケート「死別体験」 35
			テキスト授業
			レポート「終末期（死の一人旅）」 34
			レポート「乳癌と診断され」 33
16	アンケート「死別体験」 58	実習	
	テキスト授業		
	レポート「終末期（死の一人旅）」 55		
	レポート「乳癌と診断され」 55		
	レポート「事故死について」 53		

(数字は提出枚数)

## 1、終末期介護の学習は

### (1)教科テキストから

- ① 人生の終末期を迎えようとする人に対する介護については、2回生の比較的遅い時期に介護技術Ⅱ、第11章によって講義することになっている。

第1節、終末期のもつ意味として、介護者という以前に一人の人間として生と死について考えることは大変重要であり、この世で唯一たった一人の大切なあなたであると尊ばれること、また家族に対しても利用者同様の気持ちを支えるようサポートしていく必要が述べられている。

- ② 第2節では、終末期のアセスメントとして、病院から退院した直後の在宅療養開始期、安定期、臨死期、死別期の4つの期間に分け、それぞれに対応するケアについて述べられている。

以下第3節、終末期介護の実際では、身体、心理ケアを中心に具体的な援助方法が1～7の項目にわたって詳述されている。

- ③ 以上のとおり介護者にとってその持つ意味を心に刻みつつ、刻々変わる利用者の状況に応じたケアと具体的な作為が求められるのである。しかしこれだけの意味を持つ内容が現実のカリキュラムでは1時限90分の2コマで終わらせるのである。死が切実でない若い学生にとってこの講義では上滑りになることはやむを得ないことと思われたのである。

### (2)死生観を育み深めるための工夫の視点

- ① 終末期の介護のテキスト授業とともに、その内容をより充実させ死生観を育むことを目的に選んだ手法は以下の4つである。第1に、学生の「死別体験」についてのアンケート実施であり、第2に早川一光先生（医師、注①）の講演記録（生、病、老、死の内、死の部分、約90分）をビデオ鑑賞後に「終末期について（死の一人旅）」のテーマでのレポート提出、第3に「お乳にしこりがあり、診察の結果乳癌と診断された場合、あなたはどのように考えますか。」とのテーマでのレポート提出、そして第4に新聞に報道された事実に基づく交通事故死、孤独死の事例に対する感想文レポートの提出など、である。

- ② 第1の「死別体験」アンケートは、いわゆる2人称の死（注②）を想定したものである。主な内容は、①あなたの身近な人（親、兄弟姉妹、祖父母、その他親族、友人）との死別体験の有無とその関係、回数など、②人の死に対するイメージは、③死についての疑問や意見などである。
- ③ 第2の「終末期について（死の一人旅）」は3人称の死についてのレポートである。早川先生の講演は大きな会場での収録である。人間は生まれた時から死へ向かっているが、人の苦しみや悲しさはお金では買えないと医師になった経緯を交えて話された。若い学生たちは卒業して介護職についたときのことを思い浮かべながら納得する様子をレポートしていた。なお、早川先生のさきのビデオの内、「生」の部分についても1回生の前期に上映し、生の意義について考える場を済ませている。
- ④ 第3は、1人称の死、つまり自分自身の死について意識し検証する主旨でテーマを設定し、これに応えてのレポート提出を求めたものである。ただ具体的なテーマは死直接ではなく「あなたが乳癌と診断された場合」と死を連想させることとした。診断されたとき、はじめは信じられない（否定したい）信条から次は生きたいへ、さらには生きている間にやりとげたいと心の移り変わりを吐露している様が見えてくる。平成15、16年度各2回生に実施する。
- ⑤ 第4は、3人称の死というべきものであるが、19歳の交通事故死、阪神大震災後の復興住宅での独居死、孤独死（自殺の場合も）など、新聞に報道（平成16年1月10日、同14日）された事例を通じて死に対する思いをレポートさせた。19歳というほぼ同年令の青年の死へはその母の悲しみに心よせ、孤独死についてはやり切れなさと、家族に看とられながらの死のやすらぎさを感じとっていることが分かる。このレポートは平成16年度2回生のみを実施した。

## 2、「死」に対する意識とその推移をみる

### (1)「死別体験」アンケートから

- ① アンケートの集約結果は別表のとおりである。このアンケートを実施するについては、「死」についての思考が各個人の内心のことになっていることを、全学生共通の認識となるように企図したものである。
- ② アンケート集約内容から次ぎのことが伺える。
- 身近な人との死別体験は、15、16年度とも約90%の学生が、平均的に約2回を上まわる程度を経験している。
  - 死別者は祖父母その他親族などに多く、友人もかなりの数である。
  - 人の死に対するイメージは死別体験の有無を分けて各自3項目を選ばせた。「悲しい」「つらい」「別れ」が多く、「暗い」「存在しない」などは少ない。
  - 悲しく、つらい別れだという心情が学生の年令から伺うことができる。
- ③ アンケート第3項目の「人の死について疑問や意見があれば」については、15年度では35名中24名が記述している。主なものを抽出すれば次のようである。未知の世界への怖れなどで、「死ぬとどなるのか」「突然の死は自分の中で信じられないことです」「おばあちゃん子の私にとって亡くなったらと考えてしまう」「苦しみの死と安眠の死があるのか」「死は誰がつくったのかと疑問に思う」など。

死別体験のある学生は、「父の死の体験は本当に怖いものです」「母親が病気で亡くなった時は立ち直りに時間がかかった」など。望むべき方向として、「与えられた命は平等だが、どう死ぬかよりそれまでの人生が大事」「死から逃れられないし、逃れらるることではないので一生懸命生きる」「死にたくない、大切な人を失いたくない」など。これらから分かるように、死は逃れられず怖いものであるということが共通している。だから生あるうちに一生懸命生きたいという心の窓を開いている学生がいることが分かる。

平成16年度では、2回生2クラスで58名の内、この項の記述は25名。主なものは、未知への怖れとして、「死後はどうなるのか不思議、極楽はあるのか」「死はいつ訪れるのか」「運命は存在するが受け入れたくない」「死を迎える時の状態とその後を知りたい」など。体験した場合や深く考える時は、「親の死は不安。死んで自分はどこへ?」「病気などで死ぬ人もあるのに、自殺などなくしてほしい」「近くの人死に涙が出なかったのは、死を受け止めていないからか」「死は簡単な言葉で言いたくない」など。その他、「何年生きたかは重要ではない、どのように生きたかが重要」「いい人が先に死に憎い人が死なないのは」「葬儀はどうして暗い感じ」など、である。

- ④ このアンケートは学生にとって「死」を問われたのが初めてのことである。平成15年度は第3段階実習のあと教科書授業とアンケートを実施した。平成16年度は第2、第3段階実習の前に授業とアンケートを実施した。結果は内容的に大きな相違はなく、やはり死はむつかしい課題であったのではないだろうかと思う。

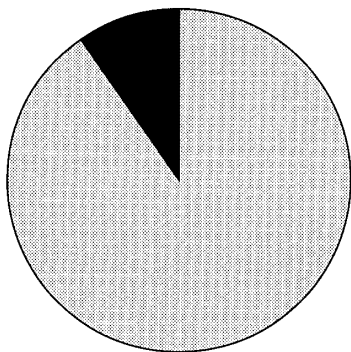
「死別体験」アンケート集約

		平成15年度2回生		平成16年度2回生	
1. 身近な人との 死別体験	①ある	32人 (91.4%)		52人 (89.7%)	
	②ない	3人 ( 8.6%)		6人 (10.3%)	
①あると答えた場合 (%はあると答えた 人に対し)	○1回	9人 (28.1%)		11人 (21.2%)	
	○2回	14人 (43.8%)		16人 (30.8%)	
	○3回	6人 (18.8%)		13人 (25.0%)	
	○4回	2人 ( 6.3%)		8人 (15.4%)	
	○5回	0人 ( %)		2人 ( 3.8%)	
	○6回	1人 ( 3.1%)		2人 ( 3.8%)	
	(計)	32人 (100%) 延べ69回		52人 (100%) 延べ136回	
②あると答えた場合 何歳の時ですか (低年齢で記憶がな い場合は除く)	○2歳3回	○12歳2回	○2歳0回	○12歳14回	
	○3歳2回	○13歳6回	○3歳3回	○13歳6回	
	○4歳2回	○14歳4回	○4歳1回	○14歳8回	
	○5歳4回	○15歳7回	○5歳6回	○15歳10回	
	○6歳2回	○16歳4回	○6歳4回	○16歳14回	
	○7歳1回	○17歳6回	○7歳6回	○17歳9回	
	○8歳2回	○18歳7回	○8歳4回	○18歳16回	
	○9歳2回	○19歳10回	○9歳9回	○19歳14回	
	○10歳1回	○20歳4回	○10歳8回	○20歳0回	
	○11歳0回	(計) 69回	○11歳4回	(計) 136回	
③あると答えた人で 死別された方との 関係 (%はあると答えた 延べ回数に対し)	○親	3人 ( 4.3%)		2人 ( 1.5%)	
	○兄弟姉妹	0人 ( %)		0人 ( %)	
	○祖父母	28人 (40.6%)		65人 (47.8%)	
	○親族	28人 (40.6%)		37人 (27.2%)	
	○友人	10人 (14.5%)		32人 (23.5%)	
2. 人の死に対するイメ ージ 1人で3項目 を選ぶ (%は有、無とも各集 計に対する割合)		①死別体験有	②死別体験無	①死別体験有	②死別体験無
	○悲しい	25人(26.0%)	2人(22.2%)	41人(26.3%)	4人(22.2%)
	○別れ	14人(14.6%)	1人(11.1%)	30人(19.2%)	3人(16.7%)
	○涙	17人(17.7%)	1人(11.1%)	25人(16.0%)	2人(11.1%)
	○悲嘆	5人( 5.2%)	1人(11.1%)	7人( 4.5%)	0人( %)
	○怖い	4人( 4.2%)	1人(11.1%)	4人( 2.6%)	1人( 5.6%)
	○不安	4人( 4.2%)	1人(11.1%)	4人( 2.6%)	2人(11.1%)
	○つらい	20人(20.8%)	2人(22.2%)	30人(19.2%)	4人(22.2%)
	○存在しない	3人( 3.1%)	0人( %)	9人( 5.8%)	1人( 5.6%)
	○暗い	1人( 1.0%)	0人( %)	6人( 3.8%)	1人( 5.6%)
	○その他	3人( 3.1%)	0人( %)		
	(計)	96人(100%)	9人(100%)	156人(100%)	18人(100%)
3. 人の「死」についての疑問や意見		記述 24名		記述 25名	
(提出数)		35名		58名	

## 《死別体験アンケートから》

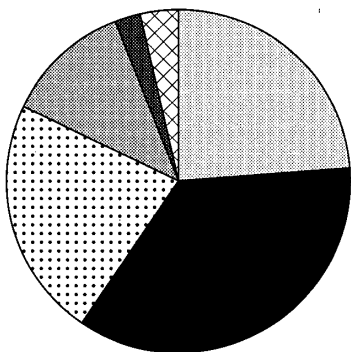
◎平成15年度、16年度の合計数をもとに、各項目についてその割合をグラフにした。

### 1. 死別体験は



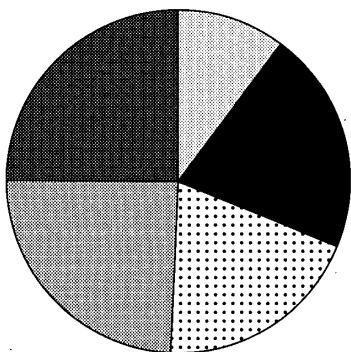
	人	%
①ある人	84	90.3
②ない人	9	9.7
合 計	93	

### 2. 死別体験は何回ありますか



	人	%
① 1回	20	23.8
② 2回	30	35.7
③ 3回	19	22.6
④ 4回	10	11.9
⑤ 5回	2	2.4
⑥ 6回	3	3.6
合 計	84	

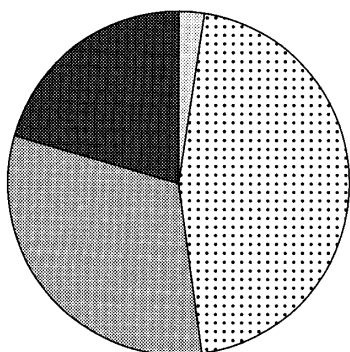
### 3. 死別体験は何歳で何回ありましたか



	回	%
①幼児期	21	10.2
②小学生	43	21.0
③中学生	40	19.5
④高校生	50	24.4
⑤短大生	51	24.9
合 計	205	

(注)アンケートでは2～20歳まで各年令ごとに集約しているが、ここでは便宜的に、①2～5歳を幼児、②6～11歳を小学生、③12～14歳を中学生、④15～17歳を高校生、⑤18～20歳を短大生として、各期ごとにまとめる。

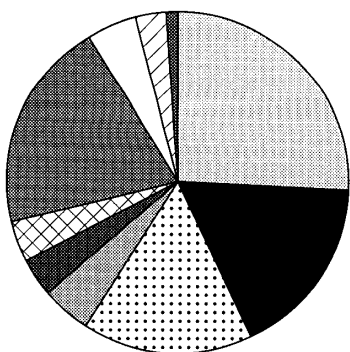
#### 4. 死別された方は



	人	%
①親	5	2.4
②兄弟姉妹	0	0.0
③祖父母	93	45.4
④その他の親族	65	31.7
⑤友人	42	20.5
合計	205	

#### 5. 人の死に対するイメージは

(注) 1人で3項目を選ぶ (93人×3)



	人	%
①悲しい	72	25.8
②別れ	48	17.2
③涙	45	16.1
④悲嘆	13	4.7
⑤怖い	10	3.6
⑥不安	11	3.9
⑦つらい	56	20.1
⑧存在しない	13	4.7
⑨暗い	8	2.9
⑩その他	3	1.1
合計	279	

#### (2) 「終末期について」(死への一人旅) レポートより

- ① 平成15年度2回生へは第3段階実習以後、教科書授業とともにビデオ上映、レポート提出という順序で実施し、34名より集約した。前述のとおり1回生の時、早川先生の「生」についてのビデオ上映、レポート提出の経過があり、その延長線としての「死」の問題意識への下敷きになっている。レポートであり数値的分析は難しいが、その内容はまさに豊かつ変化に富んでいる。共通しているのは、学生たちが早川先生の医師としての心構えの謙虚さ、立派さに感動していることである。仲間の多くが戦死するなかで自分は生き残って医師になった。そして生活に困る機織り職人が多く住んでいる京都市西陣地域で診療所を開設した。あるお年寄りの患者の肺の音を聞くと異常を感じレントゲンを撮りましょうと言うと、忙しいのでまた明日来ます、と言って帰ったが次の日来なかった。先生は私の本当の患者はいま病院に来ている人ではなく来なかったこの人を治すことだと話された。この人は自分は死ぬのではないかと思い、不安を抱いていることを先生は気づいており、この不安を取り除くことが医師(弘法大師の師)の務めだと語っておられた。不安を取り除くこと、まして死を前にして大切なことである。
- ② 平成15年度2回生のアンケートの各々から一言メッセージが寄せられている。①介護する立場からは「死の近くにいる方を最後まで気持ちよく過ごさせ、人間としての尊厳を守りたい」「寝たきりで苦しんでいる方への心の友達になることが大切で、4月からの就職に必要なこと」「終末期の方

に何がしてあげられるかが不安だったが勉強になった」「その人の生きてきた人生の最後をその人らしく飾れるよう手助けを」など。②自分の死生観と重ね合わせて「自分が人をどれだけ大切にすることによって、死というものはすばらしいものになっていく」「これまで死というものを簡単に考えてきたが最後まで頑張りたい」「自分しかできない死に方を」など。③その他3人称的に「死の一人旅という言葉聞いて恐怖感を覚えた」「息を引きとる時有り難うと言ったなら、周りの人はお金とか物とかでない遺産をもらったことになる」など、である。33枚回収された。

- ③ 平成16年度2回生は同じビデオを第2、第3段階実習前の年度はじめにテキスト授業と同じ時期に実施し、55枚提出された。述べている内容は前年度と大差ないが、①介護する立場で「その方が望む、幸せのままにということを考えながら、楽しく亡くなるまでの間過ごして頂ける介護をめざしたい」と。②自分との係わりでは「親の死を看取れるような自分でありたい」「自分のことばかりでなく相手を考えることが福祉と思う」と広がりを見せている。③その他「母に早川先生の講演の話をするよく聞いておきなさいと言われた」「お互いの心のつながり、一体となって死ぬことが安楽死という言葉に心が動かされた」なども。

以上、早川レポートは平成15年度は実習後に実施し、16年度は実習の前に実施しているものの、学生の受け止め方については余り変化はないように見受けられた。

### (3)「乳癌と診断」された場合のレポートを通して

- ① 死をテーマにしたこの一連のとりくみの中で、乳癌→死というイメージが湧き、レポートはそのように受け止め記述している。平成15年度は33名が提出した。共通として乳房という女性のシンボルをなくすことへの嫌悪感をあらわし、治るのか治らないのかと自問している様子が伺えること。そして、①何故私が……と不条理さを述べ、「生きるという気持ちを一気に消すように死という言葉が出てくれば、死に直面している姿が心に残る」「自分一人で悩んでしまう」「死ぬのが恐ろしいと何千回も言う」など、不安を隠し切れぬ。②癌を宣告されたら……「苦しんでもいいから自分のやりたいことをする」「母が52歳で亡くなった。寂しく母がいないということで立ち直るのに時間がかかった」と述べている。③一方乳癌宣告されても生を求める姿……「衝撃的であるが身体は病気になっても心まで病気でないので自分の思いをしっかり持つ」「乳癌以上に重い病気、また身体障害者で一生懸命に生きていることを考えると生きるべき」などである。
- ② 平成16年度は2回生2クラス55名のレポート集約である。受け止め方が前年度と大きく変わらないが、まず初めに現実を認めたくない自分との葛藤が始まることである。①悩む姿として……「診断されたらまず受容したように見せかけ、心の中で本当だろうか疑問になる」「自分の中で死というものに向き合うのだ」と述べている。②周りの方への気遣いで……「親の方が悲しいはず。親より先に死ぬのは親不幸と思うので1日でも後悔なく生きたいが」「終末は病院でなく自分の家だと思う」「最後まで一緒にいてくれる人を見つけ出しておきたい」など。③希望を託すこととして……「恐怖、不安を試練という言葉に変えて癌と闘うことができる」「治療に専念したい」と、言う。

以上、集約の中から特徴的なメッセージを記述してきたが、学生にたちにとっては初めて自分の死(1人称)ということが自己に問われたものであり、戸惑いつつ、今後介護に、自らの生について考



えを深め、参考になることを確信したい。

#### (4)事故死、孤独死（自殺含む）などに対する反応は

① 事実をもとにした事例に対してどのような反応をするかについて、平成16年度2回生53名よりレポートを提出させた。（16年度のみ実施）

一つの事例は、17歳の少年による19歳の青年を交通事故死させたこと、もう一つは阪神淡路大震災以後、復興住宅での独居死（自殺含む）が昨年までの4年間で251人にのぼっていること、である。ともに他人の死であるが、一つは交通事故というだれでもその身近に起きている事件、他は学生たちにとって程度の差はあれ幼少期に経験している大震災による負の遺産と言うべく復興住宅で寂しく亡くなるという事故である。学生たちのレポートではその両方の事例にコメントする場合と一方だけにしている者がある。

② 交通事故死へのレポートでは、①被害者本人のいのちや家族の人生に言及し、「事故死は亡くなった方の夢も家族の夢も奪ってしまうこと」「生活しているということは常に死と向き合っていることと感じ恐ろしい」「家族は一生忘れない」など。②事故を起こした少年に対しては、「家庭や社会で何らかの問題を抱えていたのではないか」「後悔にさいなまれているのではないか」「死に対する懲役刑が軽すぎないか」などを問う。③被害青年に対しては、「調理師として店を持ちたいと考えることは、私が介護福祉士になって頑張ろうという気持ちと同じ」と共感を寄せている。

③ 阪神淡路大震災後の独居死については、①介護するについても、「神戸での様々な問題を考えて」「週3回の見回りがあったのに介護に無理があったのでは」など。②看取られざる死へ、「男性の周りのはげましも妻の死への思いに届かなかつたのだ」「家族の支えがあれば」「死ぬ最後には家族に看取られて」と心を痛める。③そして心寄せ合うために、「毎日生きていることに感謝し、その日を精一杯に」「自治会、近所付き合い、町、市、県などと協力して」等を感じている。

### 3、死生観の確立のために～授業の工夫とも係わって

(1)授業だけでなくアンケート、レポートなどの工夫は

① 人の死は避けられないものとの認識があっても、学生にとって死が日常の思考から離れることは当然と思われる。家庭でも施設でもその生活は生きることを前提と考えられている。平成14年度までのように教科書の授業のみが死を見つめる時間では、やはり死生観（つまりどう生きるか）を考えることは不十分として、アンケートやレポート提出という負荷をかけて追及したのである。

② これまで述べてきたように、平成15、16年度とも教科書以外にほぼ同じ内容、手法のとりくみをしたが、一定の成果が上がっていると考えられる。それによれば死のことを、「これまで考えもしなかったこと」という記述がある一方、介護する立場で利用者の内心に踏み込み、ひいては自らの死（生き方）へも思考を巡らせていることもみられる。授業以外のとりくみが、利用者の死を自然なかたちでとらえ看取りをすすめるうえで、その効果を発揮してくれるものと確信し期待している。

## (2)人格形成にも役立たせたい～まとめに代えて

- ① 「乳癌と診断」（いわゆる自らの死に至ることも想定して）の中の1項として、『人の死について疑問や意見があれば』、の問いにAさん（平成15年度2回生）、Bさん（平成16年度2回生）は次のように述べている。

「いつかは誰しもが、必ずきてしまう死、みんながあたえられた命、それは平等で、死んでしまわない方はだれもいない。しかし私は、どう死んでいくかより、どう生きるか、死ぬ時よりも、それまでの人生それまでのけいかが大切なのだと思います。死ぬに向けて生きていくのではなく生きるに向けて生きていくことが大事です。」（Aさん）

「人は何年生きたかなんて、そんなに重要ではないと思う。大事なのはどの様に生きたかであると考えて。人は肉体が死んだ事よりも、誰からも忘れられた時が死ぬのだと思います。魂が生存するのが生だと思います。」（Bさん）（以上ともに原文のまま）

- ② 死を見つめることは、どのように生きるかであるならば、大きく言えば、それは自らの人格の形成に役立つことではないかと思う。もちろん全ての学生が、Aさん、Bさんのように記述しているわけではないが、このとりくみが死生観の確立をめざす体系的学習の一環としての役割をはたしつつ、専門性を持つ介護福祉士の資質の向上にもつながることは間違いないであろう。また授業する側にとってはめまぐるしく変わる福祉の分野に対応しつつ、より深く研鑽と努力への志しを忘れてはならないと痛感するものである。

注① 早川一光先生（京のわらじ医者、総合人間研究所所長）には、平成15年10月、福祉学科主催の「いきいき在宅介護講座」において『死ぬまでべんきょう』のテーマで講演して頂き、学生たちは地域の方とともにそれを聴講した経過がある。

- ② 人の死を区別する方法として、自らの死を1人称の死、親しい人の場合2人称の死、特定せず無名の死を3人称の死がある。（V.ジャンケレヴィッチ、「死」より、1982年 みすず書房）

### 参考文献

- ①A、デーケン・曾野綾子編、「死と生を考える」1988年、春秋社
- ②E、キューブラロス：訳川口正吉、「死ぬ瞬間（死にゆく人々との対話）」1996年、読売新聞社
- ③早川一光、「わらじ医者京日記」、1989年、ミネラル書房
- ④京のわらじ医者 早川一光、「いきいき生きる」講演会ビデオ、2003年
- ⑤渡邊洋子、「介護における死の学び」、2003年、（第11回日本介護福祉学会大会要旨集、P.116～117）
- ⑥関根良子、「That's 誌上研修」、2003年、月間福祉Vol.3 P.70～71
- ⑦小畑万里、「専門職養成と死の教育」、2002年、月間福祉Vol.8 P.102～105